



その月ならではのテーマを特集。全てやよい図書館で借りられます。

館長が紹介する「印象に残った一文」とは？

「読者は勝手にわたしの抽斗（ひきだし）を開けてくれたらいい。
また鍵をかけておくほどのものが、わたしの抽斗に入っているものでもない。」
神奈川県立近代美術館、世田谷美術館で館長を経験した著者の、美術館の仕事や日常の風景に、正に抽斗をあけていくように出会える1冊です。読書家でもある著者が読んだ本についても度々触れられており、そこから新たな抽斗に手を伸ばしてみるのも面白そうです。私は中でも『クローディアの秘密』と「一冊の本との巡り合わせ」という題で書かれた話が好きです。
『鍵のない館長の抽斗』 酒井忠康／著 求龍堂 (青山)

フレーズ
&
センテンス

「誰か×誰か」「誰か×何か」の組み合わせが面白い！

河野裕子×永田和宏 『たとへば君 四十年の恋歌』 文藝春秋

この本には河野裕子と永田和宏夫妻の相聞歌380首とエッセイが収められています。相聞歌とは恋人同士の間で詠みかわされた歌のことで、2人が出会ったばかりの頃の歌に始まり、河野氏が乳がんを患って亡くなるまで、約40年に渡って詠み交わされた歌が載せられています。私が特に印象的だったのは、妻の歌集を読んだ永田氏が「お前はこんなにさびしかったのか」と言ったというくだりです。日頃何でも話し合っている夫婦でも分かち合えない思い、それを表現し伝えることができる短歌の凄さを感じました。(丸山)

かける
×本精読



原作本から入って良し、映画から入っても良し。

第22回 風が強く吹いている

★原作「風が強く吹いている」著者：三浦しをん
★映画「風が強く吹いている」監督：大森寿美男 主演：小出恵介、林遣都
新年が明けて様々なスポーツの大会が行われていますね！今回は、毎年寒いお正月に熱い闘いを繰り広げる「箱根駅伝」をテーマにした『風が強く吹いている』を紹介します。
大学に入学するけれど、住む場所のない蔵原走。高校時代インターハイに出た脚力を活かして万引きをしたところ、清瀬という大学の先輩につかまります。住む場所がないならと紹介されたのは清瀬の住む竹青荘。ただの古いアパートにみえた竹青荘は、大学陸上部の寮。蔵原以外の住民たちもそのことを知らず驚く中、清瀬は「住民たちで箱根駅伝出場」を目標に掲げます。箱根駅伝を知らない人でも楽しめる映画です。なぜなら、箱根駅伝を目指す竹青荘のメンバーも箱根駅伝の事を知らないから。彼らも、箱根駅伝とはどうやって出場するのかを走りながら知っていきます。原作も個性派ぞろいですが、映画でも、ソフトバンクCMのお兄ちゃん役ダンテ・カーヴァーや、映画「タッチ」に主演した斉藤兄弟など、個性的な俳優たちが走ります。
今回は「西遊記～はじまりのはじまり～」です。お楽しみに！ (大塚)



1月「石」

新年1回目のテーマは「石」。1月4日に願掛けをして石に触れると、願いが叶うのだそうです。そんな素敵な日にあやかり、いろいろな「石」の本を集めてみました。

『鉱石倶楽部』 長野まゆみ／著 文藝春秋
鉱物について学ぶ不思議な「夜間学級」、異世界を周る砂糖菓子職人の旅…。様々な石をモチーフとした、幻想的な短編集です。美しい写真と共に綴られる詩的な文章が、鉱物の魅力を一層引き立てています。
2つの異なる説明書きが各鉱物に付いているのですが、そのうち正解は1つだけ。どちらが本当の解説か、是非とも読んでお確かめください。(新井)

『ストーンヘンジ 巨石文明の謎を解く』 ロビン・ヒース／著 創元社
ストーンヘンジはイギリスを代表する遺跡であり、世界遺産にも登録されている観光名所でもあります。しかし、この巨大な石群をだれが、何のために建設したのか、ほとんど何も分かっていません。本書はこれまでに行われてきた様々な調査研究を紹介し、ストーンヘンジの謎に迫る画期的な書です。図版も多数収録されており、入門書としても最適です。(丸山)

『ひとりで探せる川原や海辺のきれいな石の図鑑』 柴山元彦／著 創元社
ルビー、サファイア、ガーネット…これらは宝石店で買うものだと思いませんか？実は、日本の川原や海辺でもこれらの天然石を見つけることができるのです。この本には石の写真に加え、見つけやすい場所や必要な道具も紹介されています。そこらへんに転がっている石ころが宝物になる。そんな素敵な体験を、あなたも味わってみませんか？(丸山)

- ・『サファイア』 湊かなえ／著 角川春樹事務所
- ・『墓石の伝説』 逢坂 剛／著 毎日新聞社

2月「カレー」

1968年の2月12日は、日本初のレトルトカレーとなった「ボンカレー」が発売された日です。それにちなんで、今月はカレーにまつわる本をご紹介します！

『カレーライスの誕生』 小菅桂子／著 講談社
日本の食卓でも馴染み深い料理ですが、本場インドのカレーライスとはどこか違う日本のカレー。発祥の地インドから、いったいどのようにして日本にたどり着き、現在のカレーの形となったのか。カレーの歴史を学べるだけでなく、カレーの原料となる香辛料やインド、イギリスのカレー事情の紹介などもあり、カレーの豆知識がたっぷりの1冊です。(竹原)

『つながるカレー』 コミュニケーションを「味わう」場所をつくる』 加藤文俊／著 フィルムアート社
あるまちでカレーをつくり、そこに住む人々に無料でふるまい、一緒にカレーを食べるという一風変わったプロジェクト「カレーキャラバン」の様子が描かれています。コミュニケーションの本質や、そこから生まれた想像以上の貴重な時間が見て取れ、自分も一緒にカレーの鍋を囲みたくくなります。(本田)

『昨夜のカレー、明日のパン』 木皿泉／著 河出書房新社
大切な人が死んでしまっても、日々は続いてゆく。その続いてゆく日常を、さらっと、でも慈しむようにすくい上げて、言葉にした小説です。晩ごはん食べたカレーの香りや、焼き立てのパンを抱えて歩く帰り道など、普段は気にも留めないような日々の一瞬が、なんだか大切に思えてくる、そんな1冊。(丸山)

- ・『インド通』 大谷幸三／著 白泉社
- ・『ぼくちカレーライス』 うちだのぶこ／作 佼成出版社